

3	学校名 住田町立世田米小学校 外4校	R4~R6
---	--------------------	-------

令和5年度研究開発実施報告書

1 研究開発の概要

(1) 研究のねらい

岩手県の中山間地域に位置し、豊かな自然に恵まれた住田町では、教育振興基本計画基本目標「生涯学び続け、新しい社会を創造する心豊かな人づくり」の基に、自立して生き抜く力や協働する力、豊かな人生や地域づくりを主体的に創造する力を身につけた人材育成を目指し、これまでもその風土を生かした教育を推進してきた地域である。しかしながら、時代の潮流の中、中山間地域における地域課題に直面している現実もまた事実である。本町が、将来にわたって持続可能な町の姿を描く上でも、ふさわしい資質・能力を獲得しながら自己の人生や社会を創造できる人材育成を目指すことは、今後ますます不可欠であり、時代が今後どのように変化を遂げてても不易な考え方である。したがって、本町で学ぶ子どもたちに、町内の小・中学校及び県立高校が一体となって具体的に育むべき資質・能力を明らかにしながら、着実に育成することができるよう、全町を挙げた教育の展開を試みる研究開発に取り組む。

(2) 研究の方針【図1-1：住田町研究開発グランドデザイン】

前述の研究のねらいを踏まえ、本研究開発においては、小・中学校及び高等学校が育成を目指す資質・能力を共有し、一体的に推進する教育を展開する。具体的には、12年間を通して、「子どもたちが変化の激しい社会において、充実した人生を実現していくために、豊かな心を持ち、自ら主体的に未来の社会を創造していくことのできる力（社会的実践力）の育成」を目指す。そのために、住田町内の教育の特色を生かした教科「地域創造学」を新設し、これを中核に位置付けた12年間の教育課程の編成と、その指導方法及び評価方法等の開発を行っている。

(3) 研究仮説

新設教科「地域創造学」において、小学校から高等学校まで、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力の育成を共通に目指し、以下の手立てを講ずることにより、新しい時代を切り拓く心豊かな人材を育成することができるであろう。

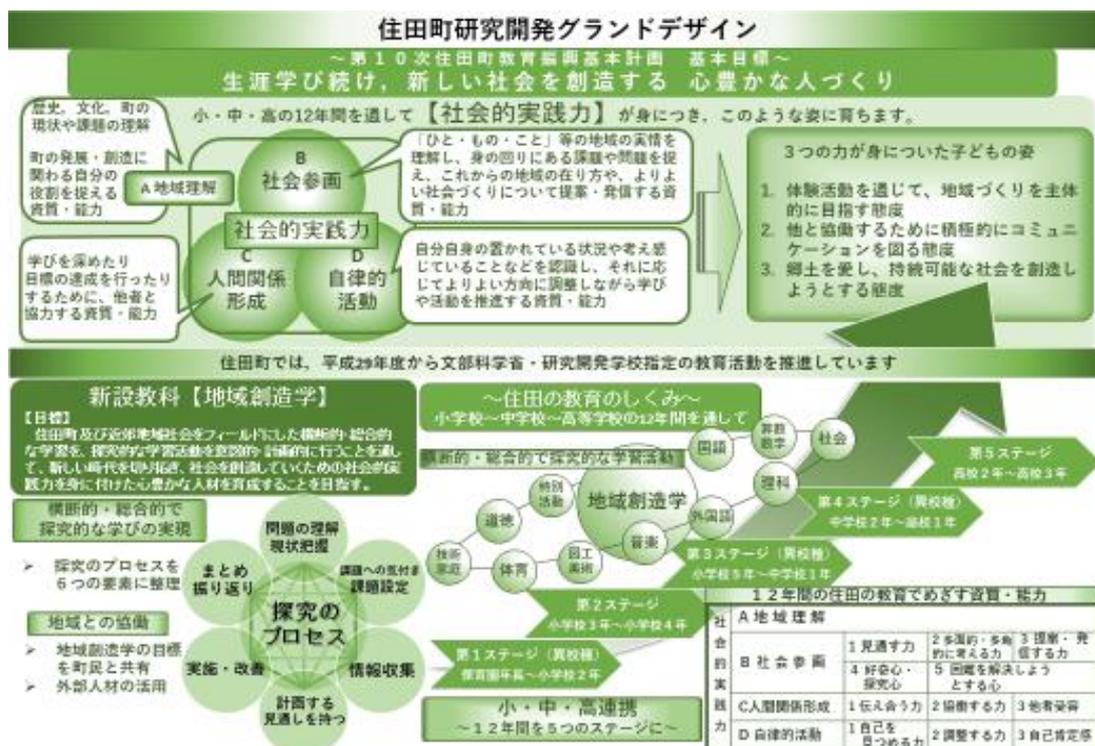
そのために具体的な手立てとして、以下の5点に取り組む。

- ① 新しい時代を切り拓くために必要とされる資質・能力（社会的実践力）の規定
- ② 社会的実践力を育成するための教育課程の編成や効果的な指導方法の開発
- ③ 社会的実践力の育成を評価するための具体的指標の開発
- ④ 教育課程の特例による教科「地域創造学」の創設と授業実践
- ⑤ 新設「地域創造学」に関するアンケート調査や外部評価の効果的な活用と教育課程等の在り方の検証

さらに研究開発学校延長指定3年間に関しては、上記に加えて、以下の3点について重点的に取組を進め、提言を行う。

- ① これまでに開発してきたカリキュラム全体の不断の見直しサイクルの構築
- ② 「探究の六つのプロセス」と社会的実践力とのつながりを意識した学習評価の工夫
- ③ 社会的実践力を育成するための「地域創造学」教科書の開発・実施・改善

【図1-1】 住田町研究開発グランドデザイン



(4) 教育課程の特例

- ① 小学校では、生活科、特別の教科道徳、外国語活動、外国語及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を1学年106時間、2学年110時間、3、4、5、6学年では85時間設定した。
- ② 中学校では、1、2学年においては国語を減じて、また、全学年において、特別の教科道徳、社会及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を1年生では59時間、2、3学年では79時間設定した。
- ③ 高等学校では、全学年において総合的な探究の時間を減じて、「地域創造学」を1単位35時間設定した。

2 研究開発の経緯

(1) 研究の経過

	実施内容等
第2年次	<p>(1) 新設教科「地域創造学」の実施と改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証 ② 新設教科の評価規準と評価方法の実施と検証 ③ 新設教科「地域創造学」の教科書（試案：小・中学校版）作成 <p>(2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の実践交流と研究協議 ② 授業実践を基にした新設教科「地域創造学」と既存の教科の関係性についての分析・探究 ③ 社会的実践力の育成に向けて、主体的かつ意欲的に授業に取り組みせる指導方法の工夫・改善 ④ 授業実践を通じた教材の開発と改善 ⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施・改善 ⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を町ホームページ等を通して公開、研究成果を次年度へ還元する方策の提示

	(3) 社会的実践力の把握と分析 ① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ② 各種調査（全国学力・学習状況調査等）との関連についての分析・評価 ③ 教育達成調査における12の資質・能力の児童生徒の変容等についての小・中・高教員による詳細な分析 (4) 研究開発実施に関する体制の整備 ① 運営指導委員会による評価をもとにした延長指定第2年次のまとめ ② 教育研究所保小連携部会を中心に、保小が連携して第1ステージの保育・教育の在り方を検討
--	--

(2) 評価に関する取組

	評価方法等
第2年次	(1) 運営指導委員会（年3回）の開催 ① 延長指定第2年次の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ ② 延長指定第3年次以降の教育課程についての検討 (2) 延長指定第1年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等を評価 ① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施 ② 教育達成調査、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施 ③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査（CAN-DOテスト）、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査等、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析、評価 ④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析 ⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施 (3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化 (4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を4月・2月に、教職員研修会を7月に開催

3 研究開発の内容

(1) 教育課程の編成に向けて

本研究開発は、町内の小・中学校及び県立学校が町教育研究所と連携し、自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成を目指し、取り組むものである。全ての校種が目指す資質・能力「社会的実践力」を12年間という長いスパンで育成していくために、小学校から高等学校までが一貫して地域資源を学習材とした横断的で探究的な学習活動に取り組む新設教科「地域創造学」を中核に据えた教育課程を編成した。

① 社会的実践力について

本研究においては、育成を目指す「社会的実践力」を以下のように定義している。

【社会的実践力】

児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

社会的実践力として形作られる12の資質・能力を規定し、大きく「地域理解」「社会参画」「人間関係形成」「自律的活動」の4つに分類し【表3-1】【表3-2】、地域創造学において育成を目指す社会的実践力は、それぞれ独立して育成されるものではなく、地域理解の資質・能力と相互に関連付けられ、重なり合いながら育成される資質・能力として定義している。

【表3-1】社会的実践力を形作る12の資質・能力

社会的実践力	A 地域理解	☆見通す力	他教科等との汎用性
		☆多面的・多角的に考える力	
		☆提案・発信する力	
		★好奇心・探究心	
	B 社会参画に関する 資質・能力	★困難を解決しようとする心	
		☆伝え合う力	
		☆協働する力	
		★他者受容	
	C 人間関係形成に関する 資質・能力	☆自己を見つめる力	
		☆調整する力	
		★自己肯定感	
D 自律的活動に関する 資質・能力			

【表3-2】

地域創造学における社会的実践力のとらえ（社会的実践力を構成する資質・能力の分類） (220401改訂版)

【社会的実践力】児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心をもち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

☆ 汎用的スキル ★ 態度・意欲・学びの価値

A 地域理解		・地域づくりの基盤となる、地域の事象への基礎的な理解。 ・地域を創造する主体である、自己の役割への理解。
B 社会参画に関する資質・能力	1 ☆見通す力 【☆見】	・自分や集団にとっての課題や問題を発見する問題発見力。 ・目標の達成に向かって、解決の道筋を見通し計画する力。
	2 ☆多面的・多角的に考える力 【☆多】	・事象の特色や関連、意味や意義などを考察する力。 ・問題解決のために何を活用して何を行うか構想したり判断したりする力。
	3 ☆提案・発信する力 【☆提】	・よりよい地域づくりに向けた取組を提案する力。 ・考察したことや構想したことを効果的に発信する力。
	4 ★好奇心・探究心 【★好】	・身の回りや地域の事象に興味・関心を持つ態度。 ・知りたいことや解決したいことをみつけようとする態度。
	5 ★困難を解決しようとする心 【★解】	・失敗してもあきらめずに挑戦しようとする態度。 ・困難な場面に直面しても粘り強く取り組み、最後までやり遂げようとする態度。
C 人間関係形成に関する資質・能力	1 ☆伝え合う力 【☆伝】	・考察したことや構想したことを等々、工夫しながら伝え合う力。 ・他者との対話の中で、自己の考えを広めたり深めたりする力。
	2 ☆協働する力 【☆協】	・目標達成に向かって、他者と協力して活動する力。 ・議論し合ったり、集団活動を統制したりする力。
	3 ★他者受容 【★受】	・多様な他者の考えや価値観、立場を受け入れる態度。 ・相手を尊重したり敬意を抱いたりしようとする態度。
D 自律的活動に関する資質・能力	1 ☆自己を見つめる力 【☆自】	・自己の学びの状況や、成果・課題を客観的に把握し認識する力。 ・自己を見つめ、自己の姿容や成長を捉える力。
	2 ☆調整する力 【☆調】	・自分の学びや活動をよりよいものになるよう調整しようとする力。 ・自分の学びを調整しながら思いや目標の実現に向かって活動する力。
	3 ★自己肯定感 【★肯】	・学びの過程を省察したり、やり遂げた達成感を味わったりしながら自分のよさを捉えようとする態度。 ・自分の可能性を前向きに受け止め、よりよいものを目指して取り組もうとする態度。

育ちと学びを滑らかに接続していくために、発達段階を保育園の年長児も含めた5つのステージのまとまりで編成し【表3-3】、12年間をとおして、町全体で目指す子どもたちの育ちの姿を俯瞰しながら、地域創造学で育てたい資質・能力の確実な育成に向け、社会的実践力の系統表を作成し、五つのステージにおける社会的実践力について、その系統性を明らかにした。

【表3-3】発達段階に応じて編成した五つのステージ

- ・第1ステージ：保育園年長児、小学校1年、小学校2年
- ・第2ステージ：小学校3年、小学校4年
- ・第3ステージ：小学校5年、小学校6年、中学校1年
- ・第4ステージ：中学校2年、中学校3年、高等学校1年
- ・第5ステージ：高等学校2年、高等学校3年

各ステージにおける社会的実践力の系統表に示したものは、各ステージにおける発達段階に応じた学びの様相としてまとめているものであり、到達目標という意味合いというよりは、子どもたちの学びの姿を目安として整理したものである。令和3年度には、資質・能力及び系統表に基づいて授業実践を進め、取組における成果や課題、実践からわかってきた児童生徒の実態等に応じて、12の資質・能力及び系統表の見直しを図り、自律的活動に関する資質・能力について、「メ

② 地域資源を学習材とした系統的な学びの在り方について

【地域創造学の目標】

住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的・総合的な学習を、探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

上記の目標にある通り、地域創造学においては、住田町及び近郊地域社会に溢れる地域資源を学習材にして、小・中・高の児童生徒が、探究的な学習活動を意図的・計画的に行っていく。「意図的」とは、その時期だからこそ学ぶ意義や価値が大きい学習内容を、ふさわしい学びのステージに位置付けることである。「計画的」とは、学習内容のつながりや学習方法、児童生徒の資質・能力の系統性を吟味して位置付けることである。具体的な学習内容に関しては、以下のようなものが例として考えられる。あくまで数多く考えられる具体例の中の一部であり、本研究開発の根幹である各ステージにおける社会的実践力の系統表を基に、町全体で目指す子供たちの育ちの姿を俯瞰しながら、小・中・高の各ステージにおいてどのような学習を位置付けることが系統的な学びにつながるのかについて吟味し、教師が意図的に指導計画に位置付けていく必要がある。

- ・住田の産業を通してこれからの町づくりを考え、発信する学習
- ・住田町のよさや抱えている課題を学び、実践的な行動を通して地域へ貢献する学習
- ・住田固有の有形無形の文化遺産や、先人の残した文化的業績の価値を享受する学習
- ・住田と世界のつながり等に目を向ける国際理解に関する学習
- ・地域の中でふるさとの発展のために力を注ぐ人々から生きる事や働くことの意味を学ぶ学習
- ・学校や地域が一体となって取り組む活動へと発展的に広がる学習

③ 年間指導計画及び単元計画の見直しについて

これまでの授業実践及び授業研究会等を通じて、各ステージにおける社会的実践力の系統表と照らし合わせながら、年間指導計画及び単元計画が社会的実践力を育成していくための内容となっているか、系統性を重視したものとなっているか等について「学習指導検証部会」を中心に議論を重ねてきた。系統的な学びを意図的に位置付けた計画となるよう、小学校から高等学校までの全校種が集まり、定期的に見直しの機会を設定し、単元設定の理由をより明確にするための様式等を含めて、年間指導計画及び単元計画の修正を図った。今後も、修正を図った年間指導計画及び単元計画に基づき児童生徒が自身のプロジェクトを実現する過程において、どのようなプロセスの中で社会的実践力に関わる変容や実践に結び付いていったのかを検証していく。

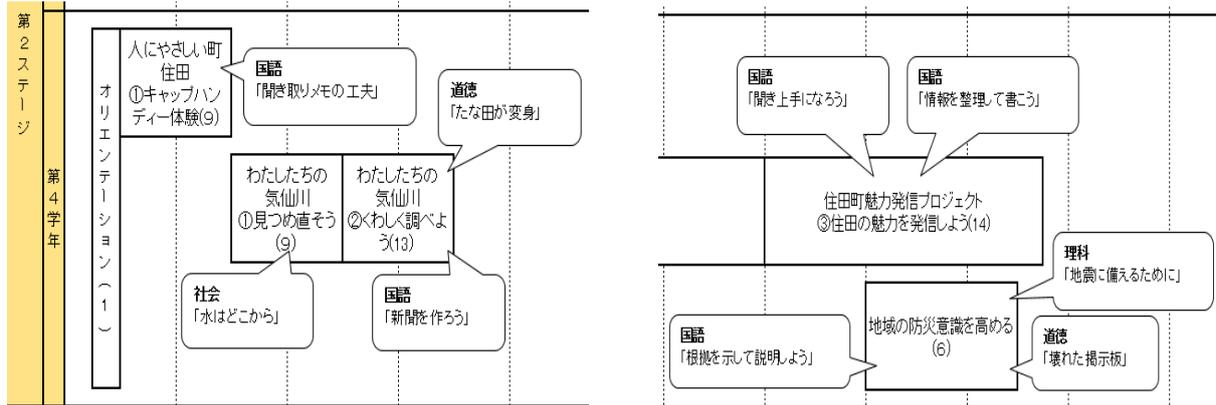
6 単元の指導

月	小単元名	プロセス	時	ねらい	主な学習活動 (◇ 指導上の留意点)	評価 (評価方法)
6月	一次 「気仙川を見つめなおす」	問題の把握・現状の理解	1	地域の自然の特色を捉え、気仙川への興味・関心を高めることができる。	① 地域の自然について知っていることを話し合う。 ◇ 地域の自然の特色を語る上で気仙川が欠かせないことに気付かせる。 ② 気仙川について調べてみたいことを話し合い、単元の探究の見直しをもつ。	C1：伝え合う (気仙川についての話し合いの際の発言)
		見直しをもつ	2	学校の周りの気仙川の様子について調べる計画を立て、見直しをもつことができる。	① 気仙川について調べる内容や方法について話し合う。 ② 学校周辺の気仙川探検の計画を立てる。 ③ 探検の仕方や見学のみまりの仕方を確かめるなど、探検の準備を知る。 ◇ 気仙川を様々な観点(自然・文化など)で調べることができるように計画を立てる。さらに、釣り人など周辺にいる人に話を聞くことができるように準備をさせておきたい。	B1：見通す (学校の周りの気仙川について調べる計画の記述)

④ 地域創造学で育む社会的実践力と各教科等で育む資質・能力の関連について

地域創造学で育む社会的実践力を支える資質・能力のうち、「B 社会参画に関わる資質・能力」「C 人間関係形成に関わる資質・能力」「D 自律的活動に関わる資質・能力」の11の資質・能力（汎用的スキル及び態度・意欲・学びの価値）は、各教科等においても育まれる関連能力である。地域創造学と各教科との関連を検討し、現場の教員が各教科との関連を意識し活用しやすくするために、各教科等の単元との関連について作成した各教科等との関連検討表【表3-5】も意識して授業実践を行った。新設教科でのこれまでの指導により明らかになった成果や課題を、各教科における指導にも生かす視点を整理し、教育課程全体における指導方法及び児童生徒の学習方法の改善を図っていく。

【表3-5】地域創造学教科関連表（一部抜粋）



(2) 地域創造学の学習指導について

① 体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について

児童生徒が学びの意義や価値について実感を持ちながら学習が展開できるよう、特に体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について考える実践を展開した。

以下は、本年度、各校種で地域創造学に位置付けた体験活動の種類をまとめたものである。第1ステージから第2ステージは、地域のよさに気づき地域理解を深める活動を中心に、第3ステージから第5ステージにかけては町の課題に対して児童生徒が主体的に向き合い、課題を知ることや課題解決に取り組む探究活動を取り入れていくことができた。各ステージにおける社会的実践力の系統表を基に、ステージの段階によって何を目指していくのかについて、引き続き校種を越えてさらに議論を重ね、共通理解を図っていく。

【R5 地域創造学に位置付けた体験活動】

小学校	中学校	高等学校
学校探検、植物の栽培、町探検、郷土芸能、水生生物調査、キャップハンディ体験、野外活動（種山高原）、町のよさや課題を考える活動（町内でのリサーチ、まとめ）等	町の魅力を高めるためのプロジェクト活動（町内でのリサーチ、プラン作成と実践等）、職場体験等	町の課題を解決するためのプロジェクト活動（町内、町外でのリサーチ、プラン作成と実践）等

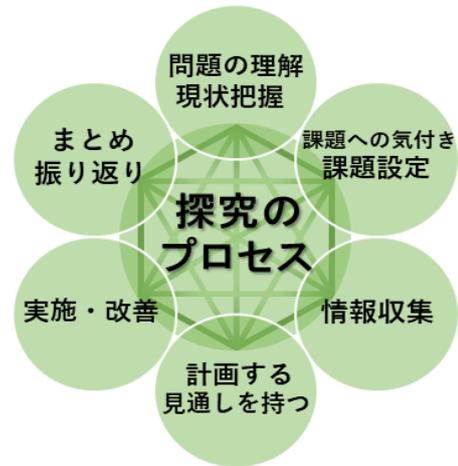
② 住田型探究のプロセスの実施について

【本町における探究の六つのプロセス】

平成30年度までの実践により、一般的な探究のプロセスは、「問題の理解」をスタートとし、「課題設定」、「情報収集」と進んでいくことが多いが、プロセスはいつでも一方向とは限らず、時に「実施・改善」と「見通しを持つ」のプロセスが往還されたり、「問題の理解」からではない段階が起点となって学びが始まったりすることが明らかになった。

そこで令和元年度からは、新たに本町における探究の六つのプロセスを設定して、実践を進めている。地域創造学では「①現状把握・問題の理解、②課題設定・課題への気付き、③情報収集、④見通しを持つ・計画する、⑤実施・改善、⑥まとめ・振り返り」

というプロセスが発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した学習を展開している。六つのプロセスは①から⑥へ向かう一方向に限定せず、児童生徒の進行状況を詳細に見取りながら、学習状況に応じてプロセスを往還することなども含めて、探究活動を柔軟に行わせている。



授業実践例 小学校6年生 「くらしを支える働き」

町民のくらしを支える行政の働きについて学習を進めてきた6年生は、住田町の移住支援や子育て支援に携わる方、住田テレビに関わる方々などと実際に対話をしながら学ぶことで、事実だけではなく、取り組む人々の思いや願いに気づくことができた。そして、これまでの学習における学びの「振り返り」から、町が抱えている課題に気づいた子どもたちは、元気ある町にしていきたいという思いから、町をPRするポスターを作成し、住田町内外のたくさんの方々に見てもらえるようにという観点でポスターを貼る場所を考え、様々なお店や観光地へ依頼を行った。課題解決に向けた実践を進めていく過程において、さらに地域の方々に向けて幅広い発信を行う方策を考え、地元のケーブルテレビや町の広報紙を通して、これまでの学びやポスター作成の経緯、自分たちの思いなどを発信した。

学習後、子どもたちは、発信する力が身に付いた、もっとたくさんの人たちに住田町を知ってもらいたいと思った、などという感想をもっており、自分たちにできることは何かと意欲的に考える児童の姿が見られた。



僕たち、私たちにできること

★問い合わせ
有住小学校 ☎48-2014

有住小学校の6年生は地域創造学の学習の一環として、町民のくらしを支える行政の働きについての学習を深めてきました。

その後、町のために自分たちにできることとして、ポスターを作成しました。町内外のたくさんの方々に町の良さを知ってもらい、さらに元気ある町になってほしいという思いが込められたこのポスターは、町内10箇所に掲示されています。

町役場では、交流プラザにて11月30日(木)まで掲示しますので、ぜひご覧ください。

▼役場でポスターを見た後は、児童への感想もお寄せください！

③ 児童生徒同士の校種間交流について

地域創造学においては、町全体の小・中・高で目指す資質・能力や内容、指導方法及び評価方法を共有している利点を生かし、単元の内容に応じて積極的に校種間交流を行っている。それぞれの小学校の児童が共通単元に基づき合同で実地調査を行ったり、それぞれの学区に関わる「地域の歴史」を発表したりして深め合う同校種間交流を行っている。さらに、小学生と中学生の児童生徒、中学生と高校生の生徒同士が互いのプロジェクトを参観する異校種間交流では、プロジェクトの進捗状況や成果物について評価し合ったり、後輩が探究活動の質を更に高めるために先輩にアドバイスを求めたりする姿が見られた。同校種間で学びを深め合うことはもちろんのことであるが、異校種の先輩や後輩と共に学び合うことも、児童生徒の学習意欲に前向きな効果を与えるものと考えられる。

授業実践例 小学4年生 「わたしたちの気仙川」

本単元の題材である「気仙川」は、農業用水や水力発電、町民の生活で使う水としても利用され、住田町の生活を支える川である。地域の人々は気仙川を誇りに思い、定期的に河川の清掃活動を行うなど、地域が一体となって保全活動に努めている。

この単元では、発表会にとどまらず、フィールドワークやゲストティーチャーを招いての情報収集などを2校の小学校合同で行った。学習を進めていく中で、両小学校の児童それぞれの視点からの発言やつぶやきに触れ、互いに新たな気付きや発見を得ることができた。気仙川が自分たちにとってどのような存在であるかに気付くとともに、川を守ろうとする人々との関わりを通して、自分たちも気仙川を大切にしようとする気持ちを抱いていた。また、長年、気仙川の水害から町を守り、町民の生活を支え続けた町の中心部に架かる昭和橋へ感謝の気持ちを伝えたいという実践にもつながった。同一単元内で学習内容を揃え、探究活動を合同で行うという同校種連携によって地域理解が深まり、自分の思いや考えを行動化することに至った実践例であると捉えられる。



④ 地域創造学に関する異校種の指導との接続について意識した指導の工夫

令和3年度に行われた、ステージ内及びステージ間での学習内容の系統性や反復性、学習方法の積み上げがより効果的となるよう改訂を行った年間指導計画を基に授業実践を進めた。小学校から高等学校までの12年間を見通した上で、当該学年では何を重点的に指導していかなければならないのか、校種を越えて活発に議論を行った。校種を超え、小・中・高の12年間でいかに滑らかに児童生徒の社会的実践力を育成していくのかについては本研究開発の根幹にあたる部分である。今後も実践結果を基にした議論を重ね、よりよいカリキュラム開発に取り組んでいく。



(3) 地域との協働について

地域をフィールドにした学びである地域創造学では、地域との連携は不可欠であり、今年度の実践にも多くの方々にゲストティーチャーやアドバイザーとして協力いただいたことは、児童生徒にとって学びを深める貴重な機会となった。また、地域創造学のゲストティーチャーとして協力いただいた地域の方々からは、「学びの中で話したり、考えたり、発表したりすることを通して、大人や地域の人たちにも気付きを与えることを期待している」「この町に何が必要で、何をすればよいのか、子どもの頃から考える事が出来るようになってほしい」「自分で考える力、自分で企画して実行できる力を身につけてほしい」「地域について学ぶ中で、子どもたち自身の生き方を考える機会にもなっていると感じる」「生徒が実践するプロジェクト活動は、複数年にまたがる継続性のあるテーマ設定も効果的ではないか」と貴重な意見をいただいた。このような意見は、学校だけでなく地域全体で地域創造学を進め、地域全体で児童生徒を育てていくという意識の高まりと捉えている。新設教科及び各教科等の学びにおける「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る上で、地域創造学に参画する協力者の方々と「探究的な学びのプロセスを経ること」や「児童生徒の自己決定等を促す学習の実現」が、確かな資質・能力の育成にとって大きな意義を持つこと等をより深く理解していくことが不可欠であり、引き続き学校と地域が連携を継続し、地域の方々と地域創造学を行ったことによる児童生徒への効果を共有するとともに、町全体がよりよい教育環境の実現に向けて取り組み続けていくことができるよう、協力者による評価等も取り入れながら実践を進めていく。



(4) 評価に関する取組について

① 地域創造学における評価の基本的な考え方

地域創造学においては、児童生徒の学習状況の評価は観点別学習状況の評価を基本とするが、数値的に評価することはそぐわず、児童生徒一人ひとりにどのような資質・能力が顕著に身に付いたかを具体的に文章で記述する個人内評価で把握する。児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を重視し、学習や指導の改善に生かしていくという、指導と評価の一体化となるサイクルを大切にしていく。

② ポートフォリオ評価

児童生徒の学習の過程や成果等の記録を計画的に集積する手立てとして、町内の小・中・高が共通してワーキング・ポートフォリオ（青色ファイル）とパーマネント・ポートフォリオ（黄色ファイル）の2つのポートフォリオを使い分け、ワーキング・ポートフォリオには1年間の学びを蓄積し、パーマネント・ポートフォリオはその中から精査して残してい



く資料を12年間つないでいくために活用しており、自分が得た情報や学習内容を整理しながら集積し、単元末や年度末等の場面で、自分の学習を自覚的に振り返るツールとして活用することが各ステージ段階で定着してきている。また、パーマネント・ポートフォリオを活用して過年度の学びを振り返ることで、新たな地域課題に気付いて探究テーマを設定する等、学年間やステージ間の学びをつなぐツールとして有効性を示す事例や、一人一台タブレットを用いて調査活動をしたり、探究活動の交流を行ったり、成果物をデジタルポートフォリオとして作成したりする等、ICT機器を活用して情報を収集したり、蓄積したりする姿も見られる。

ワーキング
ポートフォリオ
(1年分)



パーマネント
ポートフォリオ
(小学校～高校)



③ パフォーマンス評価

児童生徒の学習単元と社会的実践力の系統表を基に、児童生徒の学習単元における目標設定を行い、具体的な児童生徒の学習過程を想定しながら、評価の観点や評価規準の設定を行う。これを土台として、児童生徒にとってのパフォーマンス課題やルーブリックを分析・検討し、設定する。ルーブリックを児童生徒と教師が共有し、児童生徒自身で評価の視点をわかりやすく捉えることができるようチェックリストを併用する等、引き続き効果的な手立ての検証を図っていく。

(5) 教育研究所を母体とした「地域創造学」を柱とする教育課程推進に向けた体制づくりに向けて

① 教育研究所各部会での取組

4つの部会では、各小・中学校長が部長を務め、部会の運営に当たった。

[学校カリキュラム検討部会]

1 研究の目的

地域創造学及び各教科・領域等において「社会的実践力」を育むために、「地域創造学」を据えた教育課程の編成の在り方を検討する。

2 研究の内容

- (1) 地域創造学で育成したい資質・能力と各教科・領域との関連を明らかにした教育課程を編成・実施し、次年度の学校運営計画書を作成する。
- (2) 地域創造学の教科書(試案)を作成する。
- (3) 授業実践を基にした地域創造学と各教科との関連について、分析・探究していく。

3 研究の推進

第1回 4月27日(木)

組織づくり・ねらいの確認・今後の研究推進の方向性の確認

第2回 7月11日(火)

各校における実践の交流、研究の進捗状況の確認

第3回 12月21日(木)

小学校部会

地域創造学教科書(試案)作成作業について

第4回 1月23日(火)

研究の振り返りと今後の研究推進にあたって

4 研究の実際

(1) 地域創造学教科書(試案)作成について

①目的

- ・児童生徒が主体的に探究活動を行っていくための資料とするため。
- ・持続可能な取組につなげていくため。

②内容

- ・デジタル教科書として活用できるように作成する。
- ・同校種ごとに作成する。
- ・具体的な内容
 - ア 小学校：第1学年の3単元で作成(第1ステージは小1と小2で分けて作成)
 - イ 小学校：第2学年の3単元、R4年度作成済
 - ウ 中学校：第4ステージは作成済、第3ステージはR5年度作成予定
- ・全校種共通内容
 - ア 地域創造学で身につける力(社会的実践力、資質・能力)
 - イ 地域創造学の探究のプロセス
- ・探究活動の進め方の実践例(学習シート・成果物・振り返りシート・写真等)
- ・プロジェクト活動の実践例(学習シート・成果物・振り返りシート・写真等)
 - ア 探究活動の手引き等を漸次アップデートする。
 - イ 新しい実践や単元計画の改定等に基づき、内容を更新・改定する。

③年次計画

- ・R5年度・R6年度
 - 全校種：教科書(試案)に基づく実践・教科書改善・データ(学習シート・成果物・振り返りシート・写真等)の蓄積、記録集・教科書(試案)の作成

(2) 授業実践を基にした地域創造学と各教科との関連について

①各単元の学習内容と関連が強い教科等についての整理

②小中学校共通(各教科・道徳)：関連を確認できるデータ(学習シート・成果物・振り返りシート・写真等)の蓄積

③中学校のみ：国語・社会との関連についての確認

- ・各教科における知識・技能、見方や考え方等を働かせながら学習課題を追究していること。

5 成果と課題

(1) 成果

- ①各校において、教務主任と研究主任・学年主任・教科担任等が連携を深めながら、これまでの成果や改善点を確認し、地域創造学を据えた教育課程を編成・実施することができた。また、同校種間連携及び異校種間連携も深めることができた。
- ②地域創造学教科書(試案)作成について、目的・内容等を検討・確認し、各校種で作成することができた。

③地域創造学と各教科との関連についてプロジェクト内容や成果物、振り返りシート等から、各教科における知識・技能、見方や考え方等を働かせながら学習課題を追究していることを確認し、データ（学習シート・成果物・振り返りシート・写真等）も蓄積することができた。

④中学校における教育課程特例変更（国語科・社会科時数減）に伴った教育課程を編成・実践することができた。

（2）課題

①地域創造学の教科書に基づく実践及び教科書改善について、検討・推進していくこと。

②地域創造学と各教科との関連について、データを蓄積し、分析・探究していくこと。

③同校種間・異校種間でのよりよい連携の在り方等について、さら検討していくこと。

6 今後の研究推進にあたって

（1）今後の研究開発計画全体を見通すとともに、今までの成果・改善点をしっかりと確認しながら、教育課程の編成や計画的な実施について、さらに情報交流を深め、検討すること。

（2）中学校統合に伴い、同校種間・異校種間連携について、具体的に検討・確認していくこと。

（3）中学校における教育課程特例変更（国語科・社会科時数減）に伴う成果や課題を明らかにすること。

（4）小学校の複式学級増に伴い、カリキュラム検討を継続していくこと。

[評価検証部会]

1 研究の目的

地域創造学の実践にともない、評価の在り方（パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価等）について検討し、他部会と連携して実践モデルを提案する。

2 研究の内容

（1）児童生徒の学びの過程を蓄積するポートフォリオや学習シート等を活用した多面的な評価の在り方を提案する。

（2）単元において、子どもたち自身の「振り返り」や「メタ認知」の効果的な場を設定する。

（3）指導者と子どもたちが目標（ルーブリック）を共有しながら、自己の学びを省察し、進歩の状況について子どもたちが実感できるようなルーブリックを作成する。

3 研究の推進

第1回 4月27日（木）

組織・研究内容確認、活動計画

第2回 7月11日（火）

各校の実践交流、ルーブリックのモデル化についての検討

第3回 9月25日（月）

「学びのプロセスの各段階で目指す生徒の姿について(一覧)」の検討①

第4回 12月8日（月）

「学びのプロセスの各段階で目指す生徒の姿について(一覧)」の検討②

第5回 1月23日（火）

研究の振り返り

4 研究の具体

（1）各種資料の学校間共有のため、地域創造学共有フォルダを構築する。

（2）児童生徒の実態や進行状況に応じ、探究のプロセスを柔軟に捉えさせる。

→ 興味をひくキーワードで探究のプロセスを提示、プロセス数の縮小

- (3) 他部会との連携・交流で、評価項目や内容について検討する。
- (4) ルーブリックを教師と児童生徒が共有する取り組みを推進する。

5 研究の実際

(1) 実践の再考

- ①研究のねらいの再確認(地域創造学で何を指すのか)と実践の実際について
- ②地域創造学で育まれた資質・能力の各教科等における活用の実態について
- ③調査中心の学習から主体的に創造する側面(発信・提案)を強化した学習の充実について
- ④単元計画表に基づいた学習の課題と自由度の高い探究的な学習について

(2) 地域創造学共有フォルダの設置

- ①各校実践データを地域創造学共有フォルダに保存し、実践の共有と活用を図る。

(3) 「学びのプロセスの各段階で目指す生徒の姿について(一覧)」について

- ①「学びのプロセスの各段階で目指す生徒の姿について(一覧)」の第1・2ステージ版と第3・4・5ステージ版を作成する。

6 成果と課題

(1) 成果

- ①各校の実践や実態をもとにした意見交流

今年度は、学習評価の検証の他、各校の実践や実態をもとにした積極的な意見交換を行ってきた。地域創造学のねらいや学習指導要領との関連をふまえ、学習評価の基本的な考え方や留意すべき点、理由・根拠を明確にした提案・発信の重要性、学習課題に応じて多様な学習活動が展開される探究的な学習のあり方等について検討することができた。

- ②地域創造学共有フォルダの設置

地域創造学共有フォルダの設置により、各校実践データについて閲覧することが可能となり、各校の実践状況を適宜確認できるようになった。

- ③「学びのプロセスの各段階で目指す生徒の姿について(一覧)」の作成

各プロセスで目指す生徒の姿に基づいた評価規準を一覧表にまとめることとし、第1・2ステージ版と第3・4・5ステージ版を作成した。

(2) 課題

- ①地域創造学と各教科で育まれる資質・能力の関連を位置付けた授業改善
- ②地域創造学共有フォルダの利便性向上
- ③「学びのプロセスの各段階で目指す生徒の姿について(一覧)」の修正・吟味

7 今後の研究推進にあたって

- (1) 「学びのプロセスの各段階で目指す生徒の姿について(一覧)」の活用を図るとともに、児童生徒との共有を図る。
- (2) 他部会との連携を図り、指導と評価の一体化を推進し、目指す資質・能力が育成されているかどうかについて検証していく。

[学習指導検証部会]

1 研究の目的

地域創造学年間指導計画に基づいて授業実践・評価を行い、児童生徒の実態に応じて、他部会や地域と連携しながら、計画の見直しや指導の改善を図る。

2 研究の内容

- (1) 令和5年度版年間指導計画に基づいた授業実践を行い、児童生徒の探究的な学習活動の

充実に向けた、探究のプロセスに基づく多様な授業展開の在り方を探る。

- ①児童生徒の主体的な思考を促す指導者の適切な支援の在り方を探る。
 - ②短期間ではなく、長期間にわたって子どもたちの内面に残り、活用される力を定着させる指導を工夫する。
 - ③地域の学習材を意図的・効果的に取り入れた単元計画を作成する。
- (2) 令和6年度版年間指導計画の改訂・作成を行う。
- ①ステージ内及びステージ間での学習内容の系統性や反復性、学習方法の積み上げに留意した年間指導計画の単元配列になるよう改善を図る。
 - ②共通単元の検討を通して、校種間における連携を意識した年間指導計画になるよう改善を図る。
 - ③児童生徒の主体的な思考を促し、地域のひと・もの・ことの活用や連携をより促進した単元計画を作成する。
- (3) 各ステージにおける社会的実践力系統表の妥当性の検討・改訂を行う。
- ①授業実践を通して、12の資質・能力が社会的実践力を構成するものとして妥当かどうかを明らかにしていく。特に、発達段階にあったものになっているかどうか、また、ステージごとの接続はどうかなどを検討し改訂していく。

3 研究の推進

第1回 4月27日(木)

今年度の部会の研究計画について

- (1) 令和5年度版年間指導計画に基づいた授業実践について
- (2) 令和6年度版年間指導計画の作成・改訂について
- (3) 社会的実践力の系統表の改訂について

第2回 7月18日(火)

1学期間の各校授業実践の交流と単元計画の修正、見直しについて
各ステージにおける社会的実践力系統表の検討・修正について

第3回 12月4日(月)

2学期間の各校授業実践の交流と単元計画の修正、見直しについて
各ステージにおける社会的実践力系統表の検討・修正について

第4回 2月6日(火)

単元計画の修正、見直しの確認
研究の振り返りと今後の研究推進にあたって

4 研究の実際

(1) 令和5年度版年間指導計画に基づいた授業実践について

令和5年度版年間指導計画に基づいた各校での授業実践を持ち寄り交流しあった。その中で、児童生徒の探究的な学習活動の充実に向けた探究の六つのプロセスに基づく多様な授業展開の効果的な在り方を探りながら、効果的であった実践や単元計画の見直し・改善点について話し合った。学習内容の見直し、新たな地域の学習材・地域人材の活用、図書館活用、学んだことの成果発表や発信の仕方等、細かな見直し・改善が出された。

【授業実践の交流から出された効果的であった実践・見直し・改善点(一部)】

①学習内容の見直し

小学校6年「くらしを支える働き」1次と2次の内容を入れ替え、学習の流れがスムーズになるように改善する。

②地域人材の活用

小学校 5 年他：元町長や教育委員会教育次長等をゲストティーチャーとして依頼

③地域の特性に合わせた柔軟な学習内容

小学校 1 年：柔軟性を持たせた探検先

有住中学校：閉校に絡ませた授業実践

④図書館利用

有住小学校、有住中学校：県図書館教育研究発表に係る実践

⑤教育活動全体を通じた資質・能力の育成

「根拠を明確にししながら様々な見方や考え方で検討する力・説明する力」

⑥見通しをしっかり持たせ授業のゴールを意識させた活動（成果発表や発信の仕方含む）

高校：成果発表会の工夫、中学校：見通し・課題設定を重視した実践

(2) 令和 6 年度版年間指導計画の改訂・作成について

実践交流から出された実践例・見直し・修正点を生かして改訂を行った。小学校・中学校・高校とも年間指導計画については、児童生徒の探究的な学習活動がより充実するような細かな修正を行った。ステージ 3・4 を指導する際、現在の指導計画が個人探究活動の足かせになっているのではないかという意見も出たが、目安・指針として活用し、実施する際に生徒の求める探究活動に応じて柔軟に対応していくこととしたい。

(3) 各ステージにおける社会的実践力の検討について

各校の授業実践を通して出された意見をもとに検討し、現行のものでよいと考えた。来年度については、地域創造学で育む社会的実践力を構成している A～D の資質・能力のうち、社会参画に関する資質・能力は地域創造学でこそ育みたい力であり、「A 地域理解」を基盤としながら、特に「B 社会参画に関する資質・能力」を重点として取り組んでいきたい。

5 成果と課題

(1) 成果

①年間指導計画に基づく授業実践について

- ・年間指導計画をもとに、各校で見通しをもって授業実践を行うことができた。また、その授業実践の交流から、児童生徒がより探究的な学習活動を行うことができるよう単元計画の見直しや改善を図ることができた。
- ・何のためにどのような活動をするのか、生徒一人一人に見通しや課題設定の時間をしっかりととったことにより、ゴールを意識した主体的な探究活動を行うことができた。

②年間指導計画の改訂・作成について

- ・授業実践から細かな修正・見直しを行うことができた。地道な改訂によって、より一層活用しやすい年間指導計画を作成することができたと考える。

③その他

- ・児童生徒の実態に基づいた確かな学力育成プランで育成を目指す資質・能力と、地域創造学で育成を目指す資質・能力を一体的に捉えて指導を行うことで、効果を上げることができた。

(2) 課題

①授業実践及び年間指導計画の改善と見直し

②各ステージにおける社会的実践力の育成

③指導案の様式の検討

6 今後の研究推進にあたって

(1) 授業実践を通して、今後も単元計画の改善・見直しを進めていきたい。他校との交流（同校種間、異校種間）の仕方・形態の工夫や学んだことの発信の仕方等について、さらに実践

を深めていきたい。

(2) 社会的実践力を形作る資質・能力のうち、「A地域理解」、「B社会参画に関する資質・能力」に重点を置いて取り組む上で、「C人間関係形成に関する資質・能力」、「D自律的活動に関する資質・能力」については軽重をつけながらも、どの単元でどのように指導していくのがよいか授業実践を通してさらに検討していきたい。また、指導と評価の一体化を推進していきたい。

(3) 指導案について、各ステージに合わせたシンプルで使いやすい形式を考えていきたい。

[保小連携部会]

1 研究の目的

将来自立できる人間の育成に必要な幼児教育の在り方、及び義務教育への円滑な適応・移行のための保小連携の在り方の研究を行う。

2 研究の内容

(1) 森の保育園活動と地域創造学

就学前教育期間の幼児を対象とし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識した活動を計画的・系統的に展開し、小学校へのなめらかな移行と地域創造学で目指す資質・能力の育成につなげる。

(2) 義務教育への円滑な適応のための交流

「小1プロブレム」の抑止のために保小の連携と幼児・児童の交流を深め、小学校へ進学した際の不安を少しでも軽減するための活動を行う。

(3) すみた幼児教育（保育）プランの改訂に向けた見直し

昨年度、地域創造学のカリキュラム改訂によって変わった単元計画に合わせ、幼児教育プランの内容の見直しと変更個所の提言を行った。今年度は、更に変更しなければならない箇所の確認をし、必要に応じて改定に向けた取組を行う。

3 研究の推進

第1回 4月27日（木）

ねらいの確認、研究方法や内容の確認

世田米、有住の各保小学区の打合せ

第2回 10月12日（木）

各保育園・小学校の進捗状況の確認と中間報告

第3回 12月19日（火）

今年度の実践の検証と成果と課題の確認

第4回 2月6日（火）

年間活動のまとめと反省及び次年度の活動計画の確認

4 研究の実際

(1) 森の保育園活動と地域創造学

四季折々の種山の豊かな自然を味わう「森の保育園活動」は、地域創造学で育成を目指す社会的実践力の中の特に「感じ取る力」「好奇心・探求心」「伝え合う力」「困難を解決しようとする心」の育成に寄与していると分析することができた。種山をフィールドにしたダイナミックな活動と森の案内人、高校生ボランティアとのふれ合いによる教育プログラムの価値を改めて確認することができた。また、種山での経験を日常の活動に生かす保育計画が各園で実施され、前述した資質・能力を豊かにする活動を展開することができた。

(2) 保小交流活動

コロナ禍で途絶えていた交流活動を今年度は少しずつ実施することができた。部会では「園児（年長児）・児童にとって意味や価値のある活動となっているか」という視点で検証し、次年度計画策定への方向付けを行った。

交流活動を通して、園児は児童の姿にあこがれをもち、児童の姿を模倣しながら園の中で運動会の応援や下の子におもちゃで遊ばせるといった活動につながっていった。また児童は、活動の目的を意識して準備したり、幼児を思いやりながら接したりするなど、他者に心を寄せた活動を行うことができた。今後も各小学校区の特徴を生かした無理のない交流活動を年間計画に位置付けていくことが肝要である。

保小連携の活動を充実させるために、交流のねらい等を確認する打合せ、交流後の評価・検証する場を確実にもてるようにしていきたい。

(3) すみた幼児教育プランの改訂

昨年度、「すみた幼児教育プランの改定」に向けた意見の集約と町教育研究所への改定内容の提言を行っている。来年度は、町教育研究所からの改定の方針や内容を確認し、本部会で担当内容の改定作業を行っていく。

5 成果と課題

(1) 成果

- ①各園において森の保育園活動を幼児の主体的な日常での活動にもつなげ深めることで、社会的実践力育成につなげることができたこと。
- ②「あこがれ」や「思いやり」を基盤にした交流活動を通して、幼児・児童の社会的実践力育成につなげることができたこと。

(2) 課題

- ①保育園、小学校の職員が交流する機会を積極的に設け、共通理解を図りながら連携をさらに強めていくこと。
- ②部員に小学校1年担任を入れ、実効的なPDCAサイクルを行い改善につなげていくこと。

6 今後の研究推進にあたって

(1) 森の保育園活動と地域創造学

- ①森の保育園活動と小1の種山学習の系統性について検討を行う。

(2) 保小交流活動

- ①各小学校区共通のねらいで行う活動と地域の特徴を生かした活動の精選し計画的に行う。
- ②育成を目指す資質・能力を明確にした事前の打ち合わせと事後の振り返りの充実を図る。

(3) すみた幼児教育（保育）プランの改定作業

- ①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」「第1ステージにおける社会的実践力」を手掛かりに接続期カリキュラムの見直しを行う。

- ②各学校の研究主題及び主題設定の理由等（令和5年度住田町教育研究のまとめより抜粋：研究の実際、成果と課題の詳細等は別冊資料に掲載）

[世田米小学校]

1 研究主題

地域に愛着をもち、進んで地域に関わる子どもの育成
～社会参画を視点とした地域創造学の授業の展開を通して～

2 主題設定の理由

(1) 研究開発課題から

平成29年度より住田町内の小・中・高等学校は文部科学省研究開発学校の指定を受け、「子どもたちに新しい時代を切り拓くために必要な資質・能力や心の豊かさを育成するため、小・中・高等学校の滑らかな教育の接続を活かして、教科『地域創造学』を新設した場合の教育課程、指導方法及び評価方法などの在り方に関する研究開発」に取り組んでいる。「地域創造学」では、社会を創造していくために必要な「社会的実践力」を身につけ、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成を目指しており、特に小学校段階においては、地域づくりを主体的に創造することにつながる資質・能力の基盤づくりが必要であると考えます。

そのために、地域の環境と関わることを十分に楽しんだり、地域の「ひと・もの・こと」のよさを見つけ親しんだりする経験を通して、地域への興味・関心を高め、地域への愛着を育むとともに主体的に地域に関わることができるようにしていきたいと考えた。

(2) 本校の教育目標から

本校では、「やさしく」「かしこく」「たくましく」を学校教育目標に掲げている。特に、本次研究を通して「かしこく」の具体目標である「自分で考えつくり出す子ども」を育てたいと考えている。

地域創造学では、「社会的実践力」を身に付けた児童の育成を目指している。「社会的実践力」とは、「変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力」であり、その力はまさに本校の教育の目指す「自分で考えつくり出す力」と合致する。また、地域創造学において探究的な学習を繰り返す中で、「地域への愛着」や「進んで地域に関わる態度」を育むことは、「やさしく」の具体目標である「なかよく思いやりのある子ども」にもつながるものであると考えます。地域創造学の実践を通して、「地域に愛着をもち、進んで地域に関わる子ども」を育成することにより、学校教育目標の達成を図っていききたいと考えている。

(3) 児童の実態から

本校の子どもたちは、明るく素直で、様々なことに対して一生懸命に取り組むことができる。自分たちが住む地域を「自然が豊かで住みやすいところ」と感じ、地域の祭りや行事等へ進んで参加する子どもが多い。一方で、地域に対する人々の思いに目を向けたり、地域の未来の姿について考えたりした経験は多くないと思われる。そこで、地域資源を教材として学ぶ体験的・探究的な学習活動を通して、今まで以上に地域に対する理解や愛着を深め、自分たちの生きる地域を含めた未来の社会を創造していくことができる資質・能力を育むことを目指していく。

令和元年度から昨年度まで、「地域に愛着をもち、進んで地域に関わる子どもの育成」を主題に、主体的・対話的・探究的な地域創造学の学びとして『見通し』『振り返り』の工夫「学びを深める対話の工夫」「探究活動における言語活動の工夫」に取り組んできた。研究の成果として、児童が活動への思いをもって探究活動に取り組んだり、友達や地域の人との対話から新たな気づきを得て、今まで日常的に接してきたものの意味や価値を考えたりする様子が見られるようになってきている。

今年度も、昨年度までの研究を土台としながら、さらに地域理解を深め、地域の事象の意味や価値、これからの地域の在り方について考えを深めていけるようにしていきたいと考えている。そして、学びの先にある地域への誇りや愛情などをもつこと、地域に主体的に関わりその意味や価値、課題について考え判断することなどの資質や能力の育成を図っていく。

[有住小学校]

1 研究主題

生きて働く社会的実践力の育成をめざして
～よりよく伝え合い、深く学び合うための学習活動を通して～

2 主題設定の理由

(1) 本町の地域創造学の目指す姿から

本町は、文部科学省の研究開発学校の指定を受け、自立して生き抜く力を身に付け、他と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することができる人材の育成を目指し、小学校から高等学校までが一貫して新設教科「地域創造学」を実施するために、12年間の教育課程と指導方法、評価方法等の開発を行う。

町の9割を山林が占め、自然豊かな環境にある住田町は、製鉄のような森林資源とのつながりや、砂金採取のような気仙川とのつながりなど地域特有の資源を生かし、先人たちが苦難を重ねながら発展してきた歴史がある。私たちは、その魅力ある地域素材を生かし、学習できる恵まれた環境にある。

住田町の「ひと・もの・こと」に関わり、自らが暮らす地域に愛着をもつことは、地域の課題に対して自分事として目を向け、主体的に考えるきっかけとなる。

地域の環境や課題を学習材にし、学習者が、体験活動を通じて地域づくりを実際に行う「主体者」として考え、伝え合い、学び合いながら、提案・発信しようとする経験を積むことは、将来社会を創造しようとする際の重要な力「社会的実践力」の習得につながると思う。

(2) 本校児童の実態から

本校の児童は、これまで、住田ならではの地域素材を生かし、自然の偉大さや美しさ、不思議さに感動しながら、楽しんで学習してきた。それらの学習活動の中で、与えられた課題に真面目に取り組み、アドバイスを素直に受け入れて課題解決に向かおうとする前向きな姿が見られる。しかし、その反面、自ら課題を見出し、思いや願いの実現や解決に向けて粘り強く追求することが難しいという実態が浮かび上がっていた。また、自分が経験したり、体得したりした事を他者に伝えたいという思いはあるものの、伝えたい対象を明確にし、伝えたい事柄を適切な方法やよりよい表現を選んで伝える力が十分に身に付いていないという実態が見られた。そのため、昨年度は、自ら思いをもち、主体的にかかわる児童を育成するために、単元や授業の導入と振り返りの工夫を重点にして研究に取り組んできた。その結果、児童が自分の思いをもって探究活動に取り組んだり、友達や地域の人とのかかわりから新たな気づきを得て今まで日常的に接してきたものの意味や価値を改めて考えたり、見つめ直したりし、学習の面白さや学習を通して身に付けた力を実感できるようになってきているところである。

今年度は、昨年度までの研究を土台としながら更に児童の思いや願いを大切にし、児童自身が主体となって学びを進めることができるよう、それらの基礎となる人との関わり合いの中で育まれる言語活動を充実させ、学びを深めていくことに焦点を当てて研究を進めたいと考え、本主題を設定した。

[世田米中学校]

1 研究主題

社会的実践力を身に付けた生徒の育成
～主体的・対話的な学び方を身に付ける授業づくりを通して～

2 研究の方向性

本校生徒の実態から、確かな学力を育成するために「思考力、判断力、表現力の育成」が課題であり、その解決に向けて「理由や根拠を明確にして表現する力」を育成することを全教員で共有した。ここで目指す資質・能力である「思考力・判断力・表現力」は、地域創造学の推進上の課題でもある。

また、教科の壁をなくし、全教職員による取り組みを展開するために以下の3点を行った。

- ・生徒の実態からのプランの見直し
- ・育成を目指す資質・能力の重点化
- ・これまでの取組内容の抜本的な見直し

3 取組内容

年度当初に「思考力・判断力・表現力」をどのようにとらえているか、「授業中の生徒が思考・判断・表現をしている具体的な姿」を思考してもらい、研究授業の後の研究会では、授業の中身にとどまらず、各教科における「思考力・判断力・表現力」を確認し、実践を交流し合う場を設定する等、校内研究の進め方の改善を図った。

また、各教員が毎学期1回を目標に互見授業を行うとともに、1学期末と2学期末には、「思考力・判断力・表現力の育成」についての成果と課題を振り返り、実践の修正と改善を行い、教師個々の指導の改善を図った。

4 研究実践

月日	研究・実践	内容
4月3日(月)	職員会議	協議：「研究主題、年間計画、組織等について」
5月18日(木)	校内研	協議：「確かな学力育成プランについて」
6月7日(水)	授業研究会	実践：理科(3年)
7月11日(火)	校内研	地域創造学プロジェクト発表会
7月12日(水)	互見授業	
7月18日(火)	互見授業	
7月24日(月)	互見授業	
9月21日(木)	互見授業	
10月5日(木)	授業研究会	実践：保健体育(2年)
11月13日(月)	互見授業	
11月30日(木)	互見授業	
12月7日(木)	授業研究会	地域創造学プロジェクト報告会 実践：地域創造学「活動の振り返りをしよう！」(全校)
12月21日(木)	互見授業	
1月26日(金)	互見授業	

[有住中学校]

1 研究主題

生徒の社会的実践力を育む授業の在り方の研究
～「協働的な学び」の実践を通して～

2 研究の内容

①協働的な学びを位置付けた授業づくり

各教科の授業で「協働的な学び」と「社会的実践力を育む場面」を設定し、実践していく。今年度は「意見交流」と「異学年交流」の場面に重点を置いた授業づくりを実践していく。また、研究を深めるために互見授業を実施し、全職員で参観し合う。

②住田型探究のプロセスを位置づけた地域創造学

住田型探究のプロセスをワークシートに位置づけることで、生徒自身に現在のプロセスを自覚させて、主体的な学習の展開につなげる。また、ワークシートに生徒の目標への歩みを定期的に記録させ、教師からのフィードバックを充実させることで、探究の歩みを可視化できるポートフォリオを蓄積させる。

③家庭学習の習慣化

個に応じた家庭学習について生徒と共に検討し、学習計画の立て方や学び方を考えさせる。週末課題の提出日を分散することで、自分のペースで課題に取り組ませる。定期テスト前の朝や放課後に学習タイムを設定し、生徒のつまずきに寄り添っていく。タブレット端末を有効に活用し、自主的な学習に取り組ませる。

④学校図書館教育における地域創造学の授業実践

第57回学校図書館研究大会気仙大会に向けて、図書館を利用した「読む」「書く」「話す」の活動に取り組ませる。また、地域、家庭と連携した読書推進に取り組む。

3 研究経過

月 日	研究・研修行事名	内 容	備 考
4 / 3	校内研	研究主題の確認、研究計画の確認	
4 / 18	調査	全国学調(3年)、新入生学調(1年)	
5 / 8	調査	Q-U	
6 / 5	授業研究会	地域創造学(1・3年生)	講師派遣
7 / 4	調査	授業アンケート	
7 / 11	創造発表会①	中間発表(有中1・2年生/世中1～3年生)	
7 / 27	校内研(創造)	ルーブリック・アンカー作品検討会①	
9 / 26～30	互見授業		
10 / 5	調査	県学調(2年)	
10 / 17	調査	Q-U	
11 / 10	学校図書館研究大会	授業研究会(1・3年生)	講師派遣
11 / 17	校内研	県学調、Q-Uの分析	
12 / 6	創造報告会② 授業研究会	活動報告(有中1～3年生/住高1・3年生)	講師派遣
1 / 19～27	互見授業		
1 / 31	小中交流会	活動報告(有中1年生/有小6年生)	

[住田高等学校]

1 研究主題

その時代に合った価値を生み出せる力とともに社会的実践力（12項目）を有機的に育成する。

～「社会的構造を知る力」・「課題解決力」・「自信と自己効力感」の育成～

2 主題設定の理由

住田高校生は素直で真面目である。しかし、自主性に欠けるところが見られる生徒が多い。昨今の変化の激しい社会においては、主体的に物事を考えて行動する力を身につけ、自ら社会を創造しようとする態度を育てることが重要であり、必要とされる。

また、コミュニケーション活動を大切にしながら、地域の方々と繋がりを持ち、地域社会との協働を通じて自己の生き方を考えさせ、生徒個々により良い進路選択ができるようにする。

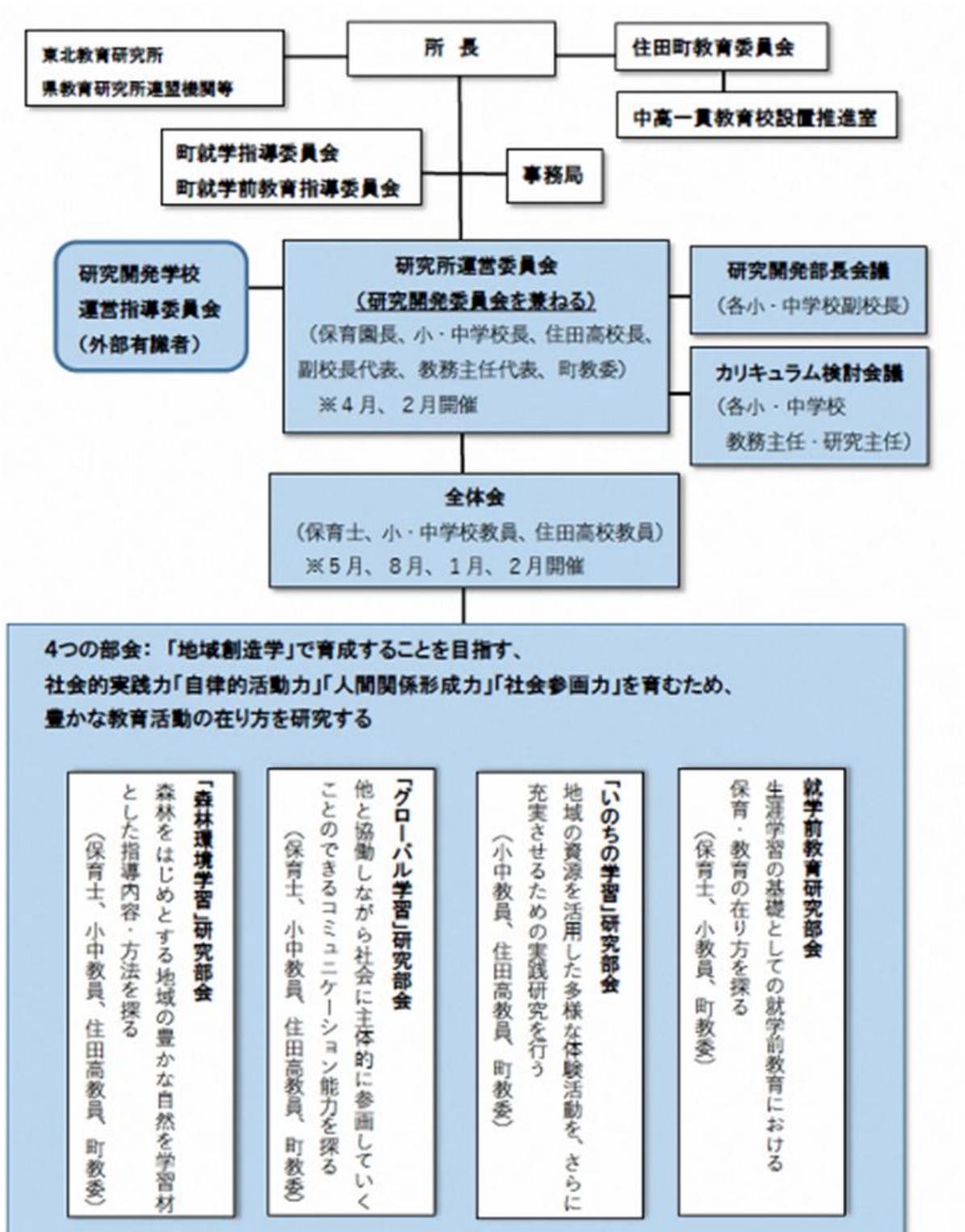
3 教員研修

- (1) 年度初めの職員会議 4月5日（水）
令和5年度 研究開発学校「地域創造学」に係る教員・CNの顔合わせ及び教職員向けオリエンテーション
- (2) 校内研修会① 9月11日（月）
テーマ「住高の地域創造学を通じて何を学んでほしいか」
- (3) 校内研修会② 9月27日（水）
第4ステージ(1年)ちょこっとチャレンジ・第5ステージ(2年)ファーストアクション
・第5ステージ(3年)ラストアクションの結果発表会
第4ステージ・第5ステージそれぞれの研究発表会を通じて、生徒の取り組み内容を確認した。町内の教育委員会関係者にも来校・視聴いただいた。
- (4) 地域創造学発表・交流会（有住中学校） 12月6日（水）
プロジェクト報告会（世田米中学校） 12月7日（木）
- (5) 校内研修会③ 後輩へ伝える会（第5ステージ） 12月22日（金）
第5ステージ(3年)それぞれがKP法（紙芝居形式プレゼンテーション）を用い説明を聴き、地域創造学3年間の生徒の取り組み内容を確認した。町内の教育委員会関係者やお世話になった町内の方々にも来校・視聴いただいた。
- (6) 校内研修会④ 1月17日（水）
第4ステージ(1年)成果発表会・第5ステージ(2年)プロジェクト中間発表会
第4ステージ(1年)・第5ステージ(2年)それぞれの研究発表会を通じて、今年度の生徒の取り組み内容を確認した。
- (7) 令和5年度「地域創造学」年間振り返り 反省会議 2月14日（火）
- (8) 他校研究会相互交流への参加及び視察
町内小・中学校校内研修会（世田米中学校・有住中学校・世田米小学校・有住小学校）

③ 教育研究所の組織について

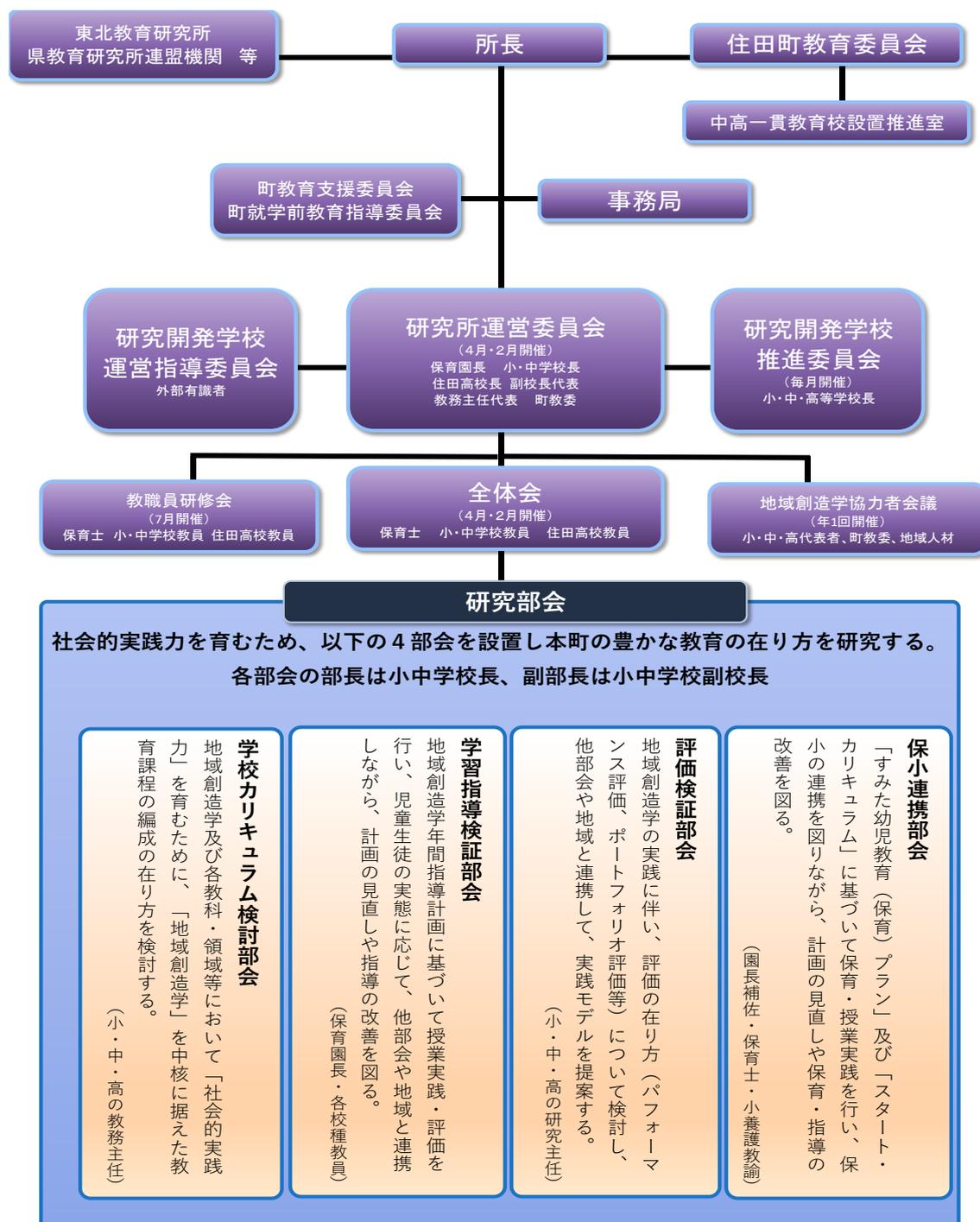
研究開発学校指定1年次（平成29年度）、各部会での取組をとおして異校種の教員が交流し互いの実践について相互理解を図ることと、各学校の校内研究において、目指す資質・能力の検討と実際の教育課程実施に向けての準備を行うことを通じ、町の教育研究所体制について改編の必要性が議論された。【表3-6】

【表3-6】平成29年度研究所組織図



2年次（平成30年度）以降、地域創造学を据えた教育課程を実施しながら、その成果や課題を継続的に検証していくために、研究所の組織を随時改編してきた。社会的実践力を育むため、本町の教育の在り方を研究する研究部会の構成を改編するとともに、夏休みに行っていた全体会は、地域資源を町内の小・中・高5校の教員が学ぶための「教職員研修会」に名称を変更し実施している。【表3-7】

【表3-7】令和5年度研究所組織図



④ 研究開発学校推進委員会と運営指導委員会の開催について

毎月、小・中・高等学校5校の校長が参加する研究開発学校推進委員会を開催し、研究開発についての検討、協議を行ってきた。

さらに、9名の外部有識者による運営指導委員会を組織し、研究について専門的見地から直接ご指導をいただいた。

【運営指導委員会】

組織

氏名	所属	職名	備考（専門分野等）
田代 高章	岩手大学教育学部	教授	教育方法学
山本 奨	岩手大学教育学部	教授	学校臨床心理学
後藤 顕一	東洋大学食環境科学部	教授	教育課程
毛内 嘉威	秋田公立美術大学	副学長	道德教育、教育課程
河野 麻沙美	上越教育大学大学院学校教育研究科	准教授	教育方法学
福嶋 祐貴	京都教育大学大学院連合教職実践研究科	講師	教育方法学
砂沢 剛	岩手県教育委員会学校教育室	主任指導主事	
七木田 俊	岩手県教育委員会学校教育室	主任指導主事	
馬場 志保	岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所	指導主事	

開催記録

	開催期日 場所	内容
第1回	令和5年7月5日 住田町役場	<p>【指導助言者】</p> <p>岩手大学教育学部 教授 田代 高章 上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 河野 麻沙美 京都教育大学大学院連合教職実践研究科 講師 福嶋 祐貴 岩手県教育委員会学校教育室 主任指導主事 砂沢 剛 岩手県教育委員会学校教育室 主任指導主事 七木田 俊</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究の方向性や計画等についての指導助言 ・令和5年度7月までの研究状況について
第2回	令和5年12月15日 住田町役場	<p>【指導助言者】</p> <p>岩手大学教育学部 教授 田代 高章 岩手大学教育学部 教授 山本 奨 秋田公立美術大学 副学長 毛内 嘉威 上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 河野 麻沙美 京都教育大学大学院連合教職実践研究科 講師 福嶋 祐貴 岩手県教育委員会学校教育室 主任指導主事 砂沢 剛 岩手県教育委員会学校教育室 主任指導主事 七木田 俊 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 指導主事 馬場 志保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究の方向性や計画等についての指導助言 ・令和5年度12月までの研究状況について
第3回	令和6年2月14日 住田町役場	<p>【指導助言者】</p> <p>岩手大学教育学部 教授 田代 高章 東洋大学食環境科学部 教授 後藤 顕一 上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 河野 麻沙美 岩手県教育委員会学校教育室 主任指導主事 七木田 俊 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 指導主事 馬場 志保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究のまとめに対する評価と次年度計画についての指導助言

⑤ 教育研究所全体会、教育研究所教職員研修会の開催について

本町の教育研究所では、町内小・中学校教諭、県立高等学校教諭、町内保育士を研究員として委嘱し、年2回の全体会、教職員研修会の開催を通じて各校の取組の共有を図っている。

【今年度の研究所全体会の開催】

	開催日	出席人数 小中高教員 保育士	会場	内容
第1回	4/27	56人	住田町役場町民ホール と町内小・中・高等学校をオンラインでつな いで実施	・今年度計画確認、部会開催
第2回	2/22	52人	住田町役場町民ホール	・部会発表（今年度の成果と課 題） ・研究推進に係る協議

【今年度の教職員研修会の開催】

開催日	出席人数 小中高教員 保育士	会場	内容
7/29	43人	町内各施設等	・森林環境学習、滝観洞、農業、まちづくりの4コースに分かれて地域資源について教職員が学ぶ研修会



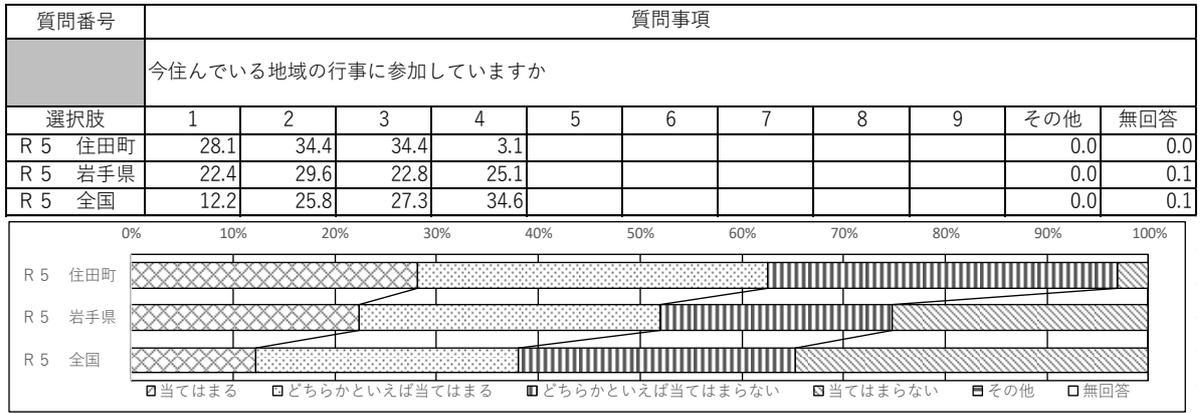
4 研究開発の結果

(1) 児童生徒への効果

社会的実践力の系統表や単元計画、学習指導要領解説に基づいた地域創造学の本格的な授業実践から3年が経過した令和3年度末、12の資質・能力や単元計画の見直しを図った。それらを受けて修正を図った社会的実践力の系統表や改訂した単元計画に基づいて「地域創造学」を実施し、引き続き地域を題材とする学びが展開された。令和5年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査（中学校3年生）の「今住んでいる地域の行事に参加していますか」の質問に肯定回答する生徒の割合は62.5%であり、県の肯定回答の割合よりも10.5ポイント、全国の肯定回答の割合よりも24.5ポイント高く、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」の質問に肯定回答する生徒の割合は87.5%であり、県の肯定回答の割合よりも15.6ポイント、全国の肯定回答の割合よりも23.6ポイント高かった。【表4-1】児童生徒にとって身近な地域資源を題材に、主体的に課題設定や情報収集などの探究のプロセスを踏ん

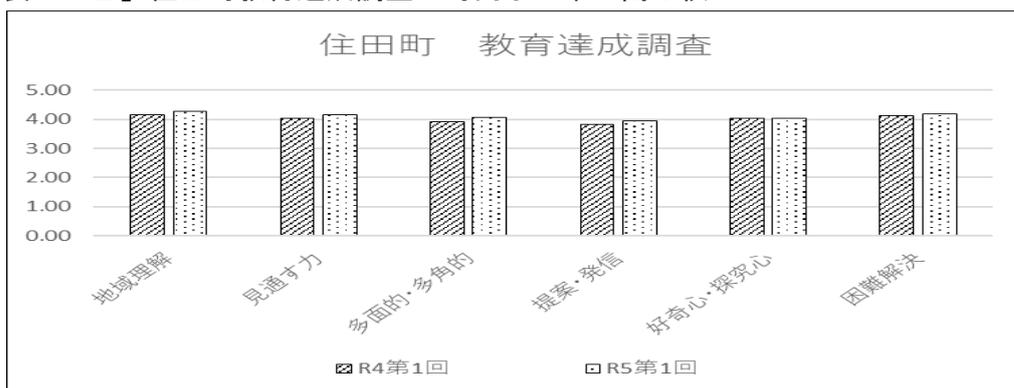
でいくことで、地域のよさについて体感的に理解を深め、地域の魅力をどのように発信すればいいのかが模索する生徒、地域課題を自分事としてとらえ、これまでに培った知識や地域の方のアドバイスを活用して解決を図ろうとする生徒などが見られ、社会的実践力に関わる様々な成長の表れであると捉えられる。今後も、地域創造学の効果的な単元構成や指導方法、評価の在り方を模索するとともに、児童生徒の変容を、教師が見とり、価値づけ、適切に支援していくことが求められる。

【表4-1】令和5年度全国学力・学習状況調査 生徒質問紙



地域創造学を通して児童生徒の学習への達成感等がどのように変容したのかをとらえるために育成を目指す12の資質・能力に合わせて作成した12の質問項目で行う教育達成調査を令和元年度から住田町内の小・中・高5校の児童生徒を対象に実施している。昨年度と今年度の調査において住田町の小・中・高5校の児童生徒の平均値を見ると、「地域理解」や社会参画に関する資質・能力である「見通す力」、「困難を解決しようとする心」などが引き続き高い値を示している。地域に対する価値の発見や課題を解決するために必要な能力に関する部分に関して、地域をフィールドに探究活動を展開する「地域創造学」を中核とした教育課程を継続して実施している事による効果が、安定して表れていると捉えている。

【表4-2】住田町教育達成調査 町内小・中・高5校



※教育達成調査の質問項目

- ・「地域理解」・・・「地域に関する学習は、自分に役立っていて、「地域は大切だ」と思うようになり、地域が好きになった。」
- ・「見通す力」・・・「自分たちの地域には、どのようなよさや問題があるのかを見つけて、問題の解決のために見通すことができる。」
- ・「多面的・多角的に考える力」・・・「地域のことについて正しい情報をもとに、自分の考えがふさわしいかどうかを、その理由も明らかにしながら考える」
- ・「提案・発信する力」・・・「地域のためになることをあれこれ考えたり、生み出したりして提案や発信ができる。」
- ・「好奇心・探究心」・・・「地域のことについてもっと知りたい、調べたいと思うことがたくさんある。」
- ・「困難を解決しようする心」・・・「思った通りに進まないことがあっても、あきらめないでやりとげようとする。」

(2) 教師への効果について

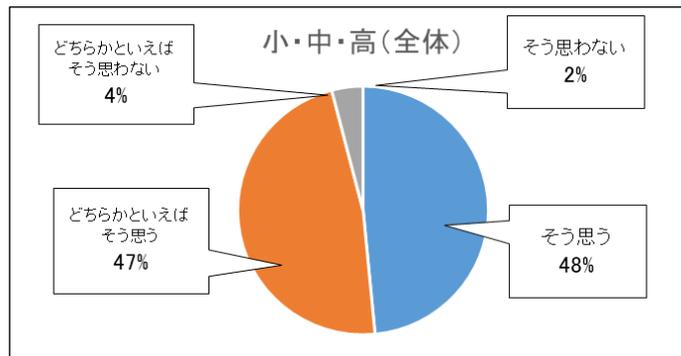
本年度も令和3年度に改訂した社会的実践力の系統表や単元計画に基づいて、本年度も授業実践と振り返りを進めてきた。授業実践を進めていく過程においては、児童生徒の実態に基づき、指導計画を随時更新しながら実践している例が見られる。このことは、児童生徒に社会的実践力を育成していくために、どのような指導内容や指導方法が適切であるのかを模索する意欲の表れであるとも捉えられる。

また、授業研究会の相互交流を通して、「他校種の先生方がどのような点に留意して指導しているのかを改めて確認することができた。今後も、校種間連携を継続していく必要性を感じた」という声が異校種の教員から聞かれた。地域創造学に係る教職員アンケートにおいても「学校内だけでは解決できない課題について、地域の方々や関係機関、異校種間との連携が深まっていると感じる」等の回答も見られた。授業研究会の相互交流や各部会での協議等において、社会的実践力の系統表に基づいてどのような力をどこまで育成して次のステージへつなげていくべきのかなど、校種を越えた12年間の学びという視点で指導や評価の在り方について絶えず検討・見直しが図られている。

(3) 保護者等への効果

【地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思うか】
(保護者向けアンケート結果)

令和4年度末に地域創造学についての、小・中・高の保護者及びゲストティーチャーやアドバイザー等でこれまでにご協力いただいた地域協力者向けのアンケートを実施した。内容は、「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思うか?」という項目に関して四段階評価で回答するもの他に、「有意義である(ない)と思う理由」や、「地域創造学に期待したいこと」を自由記述で回答するものを設定した。「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思うか?」という項目に関しては、保護者、地域協力者共に肯定的な回答の割合が高かった。その理由としては、「郷土のことを知り、体験することで郷土愛を育み地域に根差した人材を育成することができると思うから」「子供が、地域創造学が好きであるから。また、探究活動の質が高くなってきているから」「地域のことは、住んでいるだけではなかなかわからない。授業の中で時間をかけて知ることができるのは、すごく良いと思うから」などの回答が得られた。「地域創造学に期待したいこと」の項目における記述内容としては、「私達親では教えてあげることができないので、いろいろなプロの方に聞けて学習できるのは素晴らしい事だと思う」「現状を把握し、この先の未来を想像して、今どのような行動が必要なのか、子供ならではの自由な発想を発信してもらいたい」などの回答が得られた。その一方で、「有意義だとは思わない」という回答もあり、その理由としては、「地域内に留まるだけではなく、外から内を客観的に見る学習など広い視野で考えさせる」などの回答があった。今後の地域創造学の学びをより充実したものにしていくための材料とするためにも、保護者や地域の声を多面的・多角的に分析しながら、地域全体の共通理解を図るための手立て等をさらに工夫していく必要がある。



また、地域の報道機関(町営ケーブルテレビ、新聞)とも連携し、子どもたちが取り組んだプロジェクト発表会の様子や異年齢による交流活動の様子が紹介されるなど、児童生徒の学びの姿を頻繁に情報発信することで、保護者を含む地域の方々の理解が深まってきている。本町のような小規模中山間地域ならではの貴重なツールでもあることから、引き続き連携を図っていきたい。

5 今後の研究開発の方向

(1) カリキュラムの不断の見直しについて

これまでに目指す資質・能力や系統的な指導方法及び評価方法、地域の実態に即した単元計画等を開発・実践してきたが、これらのカリキュラムに関しては、常に見直しを図っていく。年間指導計画の内容が社会的実践力を系統的に育成していくものになっているか、共通単元を実施する際の学校間の協働学習等の在り方等、社会的実践力の系統表や単元計画等を含むこれまでに開発してきたカリキュラム全体に関して、児童生徒や地域、保護者、教職員の実態等を踏まえつつ、他地域の先進事例等に学びながら、常によりよい方法を追究していくことが求められる。これまでの取組や児童生徒の変容等を振り返りながら分析していく評価機会を町教育研究所全体会や各研究部会において設定し、「12年間で児童生徒の社会的実践力を系統的に育成していく学び」であるという視点を大切にしたい見直しを進めていく。

(2) 評価の在り方について

地域創造学は12年間の学びであるということを意識しながら、学年や校種を超えて児童生徒に社会的実践力に関わるどのような変容があったのかについて、長期的に評価していくことが求められる。地域創造学では「探究の六つのプロセス」を大切にしており、生徒が自身のプロジェクトを実現する過程で、どのようなプロセスの中で、どのようなことに困難さを抱き、どのように乗り越え、社会的実践力に関わる変容や実践に最終的に結びついていったのか、そして教師はそれぞれのプロセスでどのような指導・支援を大切にすることが社会的実践力を育成していく上で効果的だったのかということに関して検証していく。指導者は、児童生徒自身の変容への自覚化を促すために、「振り返り」の時間を計画に明確に位置付け、児童生徒に自身の探究のプロセスを自覚的に振り返らせることを大切にしていく。

(3) 社会的実践力を育成するための「地域創造学」教科書の開発・実施・改善

地域創造学において、児童生徒が主体的に探究活動を行っていくために試案として作成した教科書の記載内容や活用の在り方の更なる改善を図るために検証を継続していく。「探究の六つのプロセス」を大切にしたい探究の進め方、これまでの生徒のプロジェクト活動等の実践例の記載、地域の先輩の実践事例を児童生徒が自身の学習過程の中で適宜参照し、新たな探究課題を見出しながら自身の探究活動を進めていくこと等、学習者の自己決定的活動を促し、自立的に学び方を学ぶ力の育成に資する視点を大切にしながら、実践結果について検証していく。

(4) 持続可能なプログラムの構築について

町内の小・中・高5校が一体となって新設教科を据えた教育課程の在り方を探るために、町単独予算により配置した指導主事がコーディネーターとなり、地域社会や児童生徒の実態に応じた資質・能力及び系統表の独自設定や小・中・高の教員が共通理解しながら作成した12年間の系統的な単元計画の策定に取り組んできた。今後も異校種の取組を滑らかに接続させ、持続可能なプログラムにしていくために、各学校及び教育研究所各部会等の主体的な取組を適切に支援していく町教育委員会の効果的な関わり方、これまでの取組が生徒や地域・保護者にとって本当に効果的なものになっているか、指導する教員にとって無理のないものになっているか等の検証を行い、取組の内容を精選していく。